

# 故伏木測候所長大森虎之助君をしのびて

佐 藤 順 一

我国に近代の気象事業を始めたのは明治8年6月1日内務省地理局測量司御傭英人ヘンリー・ジョイナー氏の発意によったもので、その当時は海難救助の方策を建てる目的であった。勿論ただ東京一カ所の観測ではその目的に副われぬから、全国に亘って各地に観測所を設けることが必要であった。

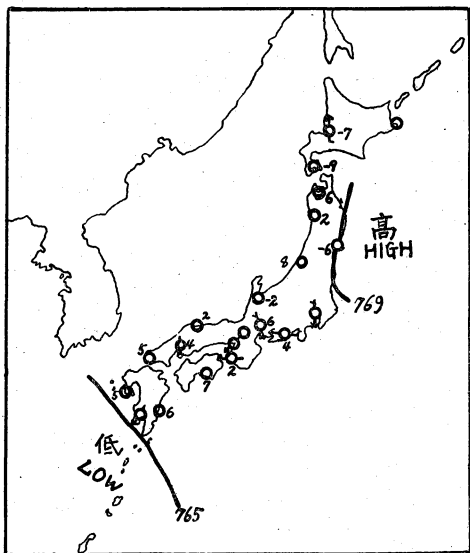
それに明治5年頃から北海道で開拓業務の一端として気候測量所の名目の下に、函館・札幌・根室で気象観測が始められていたから、それと連絡しかつ長崎・広島を始め国立もあったが、地方共営という形で大阪・京都・和歌山・高知・鹿児島・宮崎・青森・新潟・金沢・赤間関・境・岐阜・浜松・沼津・石巻・宮古等に漸次創立された、また各地の海運漁業関係者を勧誘して、測候所を創設させ漸くにして総数 20 カ所の測候所ができて、海難救助の一端として暴風警報を発布するようになった。これが明治16年6月のことで、この計画は独人エルヴィン・クニッピング氏の建議したもので、品川弥次郎氏の尽力で実行でくるようになった。そのころ明治新政府にては度々行政改革を断行する程財政究逼し、新設の事業など容易でない時代であったから、各府県令(今の知事)を通して測候所を建設させ無料の気象電報を開始するなど大変の事業であった。前記 23 カ所から電報を集めるが、何時も4・5カ所電報不通または遅着で、実際は20カ所にたらず材料で、天気図を引くから今日から見ると実に怪しいものでクニッピング氏は自から実務にあたり日曜日もその時間だけは出務し自分の手にかけたとのことで、高い卓子の上で他人の介与を許さなかった。その天気図は図の如く高低気圧の位置を示すだけという幼稚のものであった。

日本海沿岸には良港に乏しく、秋田・新潟について伏木港は良い淀泊地であり、前田家の密輸入港で海外から貴重品殊に富山の製薬の原料は全くこの港から輸入されていた。その際石川県令国重正文氏は、伏木港にさとし豪商藤井能三主唱となり町民一同の協賛を得て伏木港燈明台の一室を借受け、明治16年12月1日観測を開始した、これが民間から出来た最初の測候所で観測員二名器械類は気象台から借受け、経費としても僅か数百円に充たない有志の寄付金で維持されていた。その後制度も確

立し地方有志が気象事業につき理解の深まった結果、県費支弁となり明治25年7月には県会の協力で同町臥浦町に新築移転し、秋田測候所から敏腕の大森虎之助君を迎えて益々発展した。大森君は明治20年、18才にして秋田測候所に仕出し気象の研究に励んだ秀才であった。

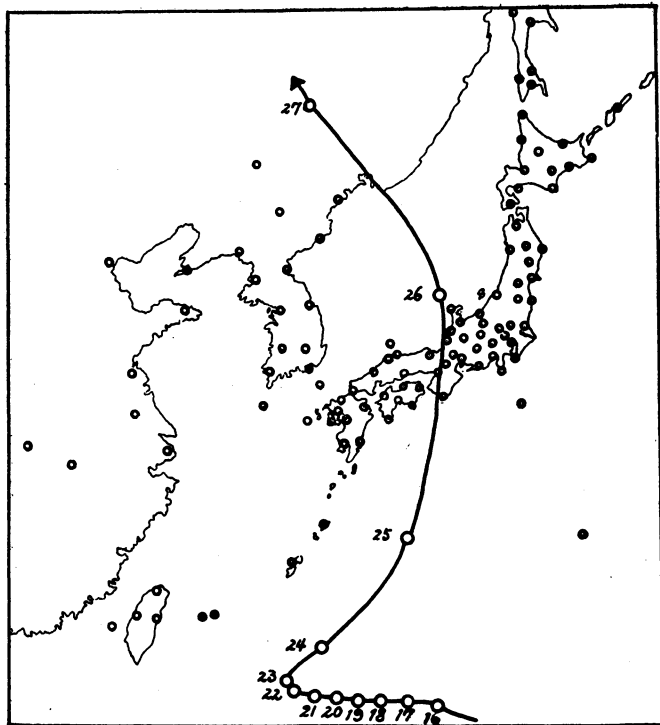
顧ると明治16年2月16日気象電報が制定せられたときは、観測所が前記の通り20カ所に足らぬ材料で天気図が出来たから誠に怪しいものであった、現今中共の資料、定点の資料がないなど不足をかこつのと較べると大変の違い、この乏しい材料から出来た天気図で予報するのだから、中々当らないのは無理もない、西部地方殊に九州地方になると、何時も犠牲にされた感があつた。それに通信はその頃まだ発達しないので遅れ勝で、暴風の終る頃やっと信号があがるので、西日本では暴風を予告する信号を天気球など嘲笑されたが、その点東部日本では比較的好意を以て迎えられていた。そうして年を追うて測候所の数も増加し、明治30年頃には77カ所、明治40年頃には100カ所を越ゆるに至り予報技術の進歩に伴い、海難の数も年々減少し実に福祉の増進に役立っていた。

それで明治41年3月には文部省訓令により「地方測候所の事業漸次整頓して、その所員もまた当地方の情况



第1図 明治16年3月1日午前6時の天気図(創始頃)

・編者註) 用語、假名ずかいは筆者の原稿のままである。



第2図  
大正10年9月下旬の  
台風経路  
○は通信地点、太い実線は台風  
経路で、○は各数字の日の午前  
9時の位置を示す

を熟知するに至りたれば、中央气象台より地方測候所に  
発送する通報に基き全国における気象の大勢を案じ、また  
各地方の地形風靡等にかんがみ、以て港湾漁村等に適  
当なる注意を与ることとなさば、港湾停泊の船舶に及  
ぼすべき暴風雨の危険を軽減するにおいて、大に便益あ  
るべしと信ず」と、大に気象予報の声価を高揚したので  
あった。これに依て従来中央气象台が暴風警報を發布す  
るの制を改め、各地方測候所が各々その所管地方に暴風  
警報を發布することになり測候所の面目を一新した。そ  
うして伏木測候所も明治42年5月には県会の決議によ  
り、伏木町古国府町に改築移転して他に劣らぬ測候所と  
なった。

所が何たる不幸か大正10年9月16日南方洋上北緯  
20度付近に現われた台風は連日遅々西に進み、22日東  
経128度付近より転向し始め、23日北東に転向するや、  
猛烈な台風となり急に速度を増した、続いて北東に進行  
するものと予想せしに25日には更に北北東に転向し、  
紀伊西部を縦断して26日一直線に能登半島の北西に達  
し、それより更に北西に転向して27日朝には西比利亜  
黒龍江中流に達した。(第2図) その間和歌山・大阪・  
神戸地方には近年稀な暴風雨となり大阪と名古屋では  
高潮をも伴って被害莫大であった。敦賀では最低気圧  
975 mb 最強風西 20.3 米、岐阜では最低気圧 973 mb  
最強風南東 43.4 米を報し、経路の各地暴風激浪沿海被

害甚しく、福井にても死者3名、浸水家屋  
3000戸、災害土木費50万円を報し、誠に  
近年稀な被害であった。この時代には漁船  
に無線などの利用はまだ緒につかず、僅か  
に陸海軍用と通信局では銚子・平磯等で開  
始されたのみであった、その後、30余年  
天気予報の研究も進歩したが、台風の進路  
は今日でも予想の出来ない程六ヶ数ものと  
されている。

伏木港にては25日まで少しも台風の影  
響現われずその進路も太平洋岸をかすめる  
ものと思われしに26日未明急に北に転向  
し来り、台風の接近と共に暴風雨25米を  
越え、風声高くなり続け、海上は激浪  
渦巻き家屋は風にあおられ倒屋無数、雨も  
強く激浪沿岸を洗い、海上の船舶は玩弄さ  
れ、海上の船舶を気遣う家族の叫声高く響  
き、罵声と風声、波音と相激して来る。救  
助船の出動、避難家族の奔走、遭難死体の  
收容、難破船の漂着日につぎ 彼は葬祭巻  
は月余に亘り悲戯の渦中にあった。伏木  
測候所では実に最強風速南東 26.8 米創立  
以来の最強風で、暴風激浪漁船の沈没実に  
1,250 艘、死者 400 名を算した。富山県下

にては県立農学校小学校等倒壊し富山市郊外大正製麻会  
社も倒壊し民家は 1,560 戸も倒壊し、泊海岸に漂着し  
た漁船 86 艘、死者 156 名を報した。

この頃測候所では技術者の宿直は普通1名で中央から  
の気象情報も若い技術員の手握られて所長は翌26日  
朝既に警戒の時機を失して登庁したのは遺憾の極のため  
に暴風警報も出せず、出漁の船舶に急を報する方法もな  
かった、それにこの被害なので、忽ち県下の大問題とな  
った、地方長官からも関係官民は勿論新聞社も筆をそろ  
えてその失策を挙げて責問するに至った。それに周囲の  
事情は幾多の方策を講ずる必要もあって、経費の運営等  
成規にもとるものも生じ職員中にも物議をかもした。大  
森君は唯々その罪を自覚し善後事務を整理し具に経過報  
告を作り遺書を卓上に残して11月26日気象予報に責  
を負うて魚津湾頭に死体を浮ぶるに至った。年齢56才  
なお春秋に富み同業者の君に期待することも多かった。

急報により東京よりは気象台技師国富信一氏が中央気  
象台台長及び大日本気象学会頭を代表して、葬儀に参列し  
香花を供え静肅の間に祭文を捧読して敬弔の誠意を表さ  
れた、実弟医師大森虎太氏が喪主で、多数の会葬者純眞  
な技師を吊り涙を流さざるものはなかった。事後の処理  
は内務部長浅利三郎氏と謀り中央より若崎良造氏を補し  
た事後既に三十余年英霊は永久に海上の守護となり気象  
技術者の霊に幸あれと祈りて茲に筆を執った。(6頁へ)

術がもつ本質的な問題点なのである。気圧配置も平均的渦度場も平均的上昇流分布も連続的に変っているが雲や雨は不連続に分布している、降水の予想は all or nothing であり、一般の予報利用者が行動を決定する時も多くの場合に決行するか中止するか二つに一つの選択である。

ここにわれわれが再び Abercromby の昔にかえて天気図とは何かを再検討、予報技術のありかたを考えなおそうとする理由がある。

#### 参 考 文 献

- (1) 久米庸孝：天気の当り外れ。科学 24. No. 10.
- (2) G. V. Elsner：天気図及び天気予報の発達。科学 5. No. 67
- (3) Encyclopedia Britanica
- (4) The Meteorological Work of the Smithsonian Institution. Amer. Met. Jour. 10. No. 9
- (5) W.A. Glassford：Synoptical Sketch of the Progress of Meteorology in the U. S. Amer. Met. Jour. 9. No. 4
- (6) Napier Shaw：Forecasting Weather (1923)
- (7) Fitz Roy：Weather Book (1863)
- (8) J. W. Smith：The Weather Bureau in its Relation to Agriculture. Amer. Met. Jour. 9. No. 1
- (9) Amer. Met. Jour. 6. No. 6
- (10) Amer. Met. Jour. 6. No. 3
- (11) R. Abercromby：On the Application of Harmonic Analysis to the reduction of

Meteorological Observations, and on the General method of Meteorology. Q. J. Roy. Met. Soc., 6. No. 27

- (12) R. Abercromby and W. Marriott：Popular Weather Prognostics. Q. J. Roy. Met. Soc., 9. No. 45
- (12)' R. Abercromby：On Certain Types of British Weather. Q. J. Roy. Met. Soc., 9. No. 45
- (13) International Meteorological Congress at Paris. Amer. Met. Jour., 6. No. 10
- (14) H. Clayton：Recent Efforts towards the Improvement of Daily Weather Forecast. Amer. Met. Jour. 9. No. 3
- (15) W. L. Moore：Rules for Weather Forecasting. Amer. Met. Jour. 10. No. 2
- (16) H. Clayton：A Seven-day Weather Period. Amer. Met. Jour. 2. No. 4
- (17) H. Clayton：An Experiment in Long Range Prediction. Amer. Met. Jour. 2. No. 4
- (18) H. Clayton：Long Range Weather Predictions. Amer. Met. Jour. 8. No. 2
- (19) J. G. Charney：Progress in Dynamic Meteorology. Bull. Amer. Met. Soc., 31. No. 7
- (20) Mc Adie：The Principles of Aerography (1917)

(中央気象台予報課)

(8頁よりつづく)

追記：その後大正11年には銚子測候所長大村信之助君数度の海難に痛心甚しく投水自殺し、昭和29年には輪島測候所長深瀬克己君海難の責を負って水死を遂げたことあり、また昭和9年9月の室戸台風には阪神地方の災害殊に著しく政府は臨時議會を召集して災害の復旧と気象事業の拡張を講じた程であったが大坂支台は警報を発する機会を逸した。また海上関係で昭和8年10月屋島丸沈没事件と近くは昨年9月26日の青函連絡船沈没また本年5月81日紫雲丸霧中衝突の惨事あり後2者はまだ海事審判に附せられておるが、災害の責務を論ずるときは予報技術者の職責論となり予報から退いて情報に留めようとする議論も起ってくる。しかし現行法規上には予報は気象官署の重大責務で、予報官の名目まで存在するから罵と検討を要する事柄である。本文を草する所以もまた、そこに存する。

\* \* \* \* \*

(18頁よりつづく) 山系の北側を通るようになると風下に当る九州から上海にかけてトラフが発生し、日本は梅雨に入り、同時に印度はモンスーンに入った。これはあたかもジェット流がヒマラヤ山系にそって流される地形の影響のために高気圧性の渦度が与えられ、渦度保存則からも期待されるように日本ふきんにトラフが発生し、高緯度の擾乱と位相が逆になる。しかしもう一つの重要な問題であるオホーツク海高気圧との関係については、ジェットの分流、ヨーロッパのブロッキング高気圧との相互作用がこの問題を解明するかぎとなる。

#### 参 考 文 献

- (1) Maung. Tun. Yin, 1949：A synoptic-aerological study of the onset of the summer monsoon over India and Burma. Jour. Met. 6, 393~400.
- (2) 須田建, 朝倉正：1954年梅雨期の北半球上層平均天気図の解拆(昭和30年2月気象学会発表)
- (3) L. A. Ramadas, 1954：Prediction of the date of establishment of southwest monsoon along the West Coast of India, Indian Jour. Met. & Geo. 5, 4, 305~314.

(気象研究所)